

東京市を中心とする幼稚園

一 記 者

幼稚園の普及状態とその經營

東京市教育概要(昭和七年度)に報告された市立幼稚園概況表は左の通りである。

区名	園數	組數	保姆數	幼兒數
麴町	四	一	一三	三五四
神田	七	一四	二四	四五五
日本橋	八	二八	二二	七七三
芝罘	九	二八	二一	八六〇
麻布	一	三	三	八六
赤坂	二	四	五	一四六
四谷	一	四	四	一四六
牛込	一	二	四	八一
小石川	三	〇	一	三四一
本郷	三	九	〇	三三二
下谷	三	九	〇	三三二

合 計	淺草	本所	深川
四二	二	一	一
一二八	一	〇	一
一二八	一	〇	一
三、九七八	三	一	八

なほ同書には

「本市に於ける幼稚園は全部區費を以て各區の施設經營する處であつて、市は之が經費につき特別の負擔又は補助金を交付してゐない。都市に於ける幼稚園教育の必要なる事は勿論であるが本市の如きは、從來私立幼稚園が相當發達してゐた關係もあり、又各區財政上の關係もあり、市立幼稚園は他の教育機關に比し不振の状態にあつたが、近來幼児教育の必要漸次市民の認むる處となりこれが普及も近き將來にある事と思ふ」。

記されてゐる。この表に掲げられた、市立幼稚園なるものは全部舊市内十五區内のものであり、其十五區の内にも表にある様に、小石川、本所、淺草の三區には缺けてゐるのである。前記の説明にある通り私立幼稚園は舊市内のみにも數に於て市立の約二倍に達してゐる、新市内を入れると殆五倍に達してゐる。今其創立を調べると市立四十二園のうち明治創立が一大正創立が二、昭和に入ってから七年度迄の分が二五であり、私立の方では明治創立三一、大正創立八六昭和七年度迄の創立が七八で公私共にいづれも大正、昭和の年代に園數が俄に激増して居る。經營は本市教育概要にもある通り全然區費に依り各區の狀態に従て一様ではないが四十二園の内、一園の幼兒數最大が二百三十名、最小が五十名全部を通じて四十二園の一園平均幼兒數が九十五名、同平均保姆數三名で保育料最高が幼兒一名月額四圓最低が二圓五十錢平均三圓八十錢で一園の經常豫算額が、三千七百六十圓九十錢になつてゐる。四十二園の保育料歳入合計が十二萬九千三百八十一圓で經常費歳出總額が十五萬七千九百五十八圓になつてゐる、(昭和七年度私立

の方の歳入歳出市教育概要には出てゐないが保育月額最高が七圓三十錢(年額八十圓)最低が一圓になつてゐる。東京女高師附屬幼稚園と女子學習院附屬幼稚園と府立女子師範附屬幼稚園と官府立の三園、市立、四十二園、私立百九十五園合計大東京市内には二百四十の幼稚園がある。これを市立小學校總數五一四、官府立私立三十一合計五百四十五の小學校數に比べれば未だ半數にも達して居ない。七年の就學兒童數七十四萬一千八百八十九に對して同年の幼稚園兒總數一萬四千二百七名、かりに其三分の二を就學兒童と見ても僅に九千四百七十二名である。大東京に於ける幼稚園教育の普及はこれからである。

園舎及園組織

官府立は別として市立幼稚園の園舎は、現在は殆ど鐵筋コンクリート建築の小學校に併置されてゐる。獨立園舎を持つものは僅四園にすぎない。之に反して私立幼稚園の殆ど多數は木造で獨立園舎を有してゐる。官府立私立を除いての園長は之亦三園の女子專任園長以外他は皆小學校長兼任園長である、百十八名の保姆のうち約半數は相當の經驗

を有する者後半數は新進の氣鋭壯なる若人達で最近は市に於ても身體検査の外筆記、口答の各方面に互り嚴密なる詮衡を受けて後就職する事になつてゐる。幼兒は法令に定められた満三歳から入學の始期に達するまでの年齢の者で、多くは校醫又は園醫の健康診断の結果申込順に許可し、四月以外には學期始或は其他にても補缺入園を許す、組分けは大方年齢別であつて、一年保育と呼ばれる、一年間保育を受けて就學する者が過半数を占め、二年保育の者が第二位、少數の三年保育者で、この三年保育の者のみで一組を編成する園はごく僅少である、大方は二年保育、三年保育の二者を合併して一組としてゐる。

組の名稱は大方植物の名、例へば松竹梅、桃櫻梅、の類で又月雪花、四季、等であつて各園の思ひくである。

四大節の儀式は、獨立園舎を有するもの、外は大方併置せる小學兒童と共に行ひ、又中には保育完了式を幼兒のみにて行ふ處もある。

幼稚園に關する諸團體

これらの市立幼稚園の内容改善を目的とし、市立幼稚園

長及保姆を以て組織されてゐる、東京市保育協議會は、保育、觀察、談話、遊戲唱歌、手技の五部に分れ、部會は部長に依て隨時に、總會は毎年一回以上、市長の定められた日に開く事になつてゐる、これは大正十四年にはじめられたものである。なほ之より前に同様の市立幼稚園長と保姆とを會員とする東京市保育會といふのが大正四年頃(?)にはじめられ後一時中絶し大正十四年秋に復興し會長、幹事、委員、會費制度にて、調査、研究、講習、見學、管外視察(これは近年は廢された、等の事業をし、園數を増すと共に會員數も増して現在に及んで居るのである。なほ此の外に明治時代(?)よりある庚申保育會、日本橋區保育會、最近産たばかりの麴町保育會等皆幼稚園教育の内容充實並に會員の親睦を目的としてゐる。又各園の事情に依り後援會、母の會、保護者會、母姊會等の團體がその個々の園の向上の爲に盡されてゐる、然しこれは市立幼稚園全部ではない、かような援助團體を持たぬ園もある。以上は主として市立幼稚園關係の團體であるが、私立のうちには佛教保育協會、キリスト教幼稚園聯盟、公、私を含む東京保育協會(現在は

中絶の形又全國的であるが最も古き歴史を持つ日本幼稚園協會がある。

保育内容

然らばかような環境に組織にある、我が東京の幼稚園の内容はさうであらうか、人口凡五百萬、面積五百五十方村、昭和七年十月からの東京は、一口に東京と云ても、商業地、工場地、官衛地、住宅地又農村、水郷、田園都市等其部分的の地方色郷土味は實に様々である。一定の教授細目と課程を持た小學教育に於てすら、郷土化せよ、生活に即せよと叫ばるゝ時に、それ以前の基礎教育であつて家庭教育をも補ふべき、幼稚園保育は、其の環境に即し郷土化する事に依て、同じ東京の幼稚園であつても内容に多大の差異ある事は當然免れない事である。所謂下町の殊に學齡前一年の幼児達には歴史的の英雄傳は、お話のうちになくはならないものとして要求されるが山の手方面では、しひて歴史に話題をよせずとも、自然現象や實話、軽い挿話等でもよるこんで聞き入る。大河副ひの園では眞帆片帆、ボート、天馬船、川蒸汽等様々な船の觀察が出来るが麻布、赤坂方

面では坂は緩急様々觀察出來ても、川や船に接する事は少ない。かやうな例を一々あげれば際限のない事である。一般的に云へば、其地域々々による郷土的色彩強く、即ち各區により、更に各園によつて又多少の差異がある。然しフレール主義とモンテッソリー主義と自由主義とかいふ或一つの主義を標榜するものも亦市立幼稚園にはない。

一海外視察員が或市立幼稚園を訪た時の問答に曰く「此幼稚園は何式であるか、フレールかモンテッソリーか其の兩者か如何に」、之、園の當事者曰く「ごちらの式でもない、けれども必要に應じては、モンテッソリーの教具もフレール之恩物も、玩具としては用ふ、昔からの子供中心の雜祭り、五月の節句又賣買遊びの中に、描く事も歌ふ事も作る事も話す事もする、強ひて云へば、日本式である」、之、その視察員は「日本式、日本式」と云て肯いてゐたこの事である。

國民教育の基礎として、昭和年代の現在の、日本幼年國民として、國家非常時に育つ、次代の成員たる者の幼時として、人間として又幼年市民として最善の保育を施さん、各園々長及保母諸君は、第一法令に基き同時に其園々々の

立場を鑑みつゝ全國の模範幼稚園である東京女高師附屬幼稚園の主張を實際を、市保育協議會又市保育會の調査研究を參考資料として、其園々々にての創造性の豊富な保育

内容が展開されてゐるわけである。それ故に範圍を狭くして、四十二の市立幼稚園のみにしても、一筆にこゝに、その保育内容なり實際なりを表す事は到底筆者の及ばざる處である、或會合の席上で、一園長(兼任校長)が云はるゝに「低學年の教育法、合科教授を綜合教育といふ事の實際は、我々は現在の幼稚園を參考とし、幼稚園の保育を研究する必要がある。其處には小學校低學年にあてはめられるべき進だ教育の實際が、すでに行はれつゝある」也。又或園長は「幼稚園の保姆も小學校の教育實際を知るべきである」、又小學校との實際聯絡上「保姆は將來全部訓導の資格ある者」等の會話があつた。是等は保育内容の一部分を語る資料にはなるまいか。

又近來、一般は幼児といふ上に、都市幼児として、都市といふ、自然から日々に遠ざかつて科學の力のみ生活して行く都市住民の幼児として、幼児の群として、特に施す

べき保育の方法に就て考へられ、又一部は實行にうつつてゐる。

(四二頁より)

宣傳してゐる手工業の獎勵にもなりません。所謂機械製の玩具及獨逸的見做されてゐるた最新式の機械類の模型玩具は一切ありません、ゾンネベルグの玩具を銘を打つてゐる點にも依りませうが、これを見ましても、現政府の幼児教育に對する方針の一端が如實に感ぜられます。

日本でも百貨店の催し以外に、こう云ふ公の玩具展覽會が欲しいと思ひます。

昭和九年一月四日 伯林にて